

---

# 闇の歌姫

ナベリウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇の歌姫

### 【Nコード】

N0085BA

### 【作者名】

ナベリウス

### 【あらすじ】

人より外見が少し変わっているからというだけで迫害を受けていた少女がひょんなことから異世界にきてしまつてそこで魔物の中でも1位、2位を表すほど強いとされているドラゴンと出会い保護される。

それから少女は人としてかけてしまった感情を取り戻していくお話です。

処女作ですので何か不快に思うことも多々あることと思いますがそこはご了承していただきたいと思います。

## 第1話 プロローグ

私はいつ頃からここにいるのだろうか？ 思いだせない。

「おい！ 見ろよ！ あそこにいるのバケモノじゃないか？」

「本当だ！ バケモノだ！ おいこっちくんなよバケモノ！」

どうしてみんな私のことをバケモノっていうんだろう？ 私何もしてないのに。

「っ！」

1人の男の子が投げた石がちょうど私の頭に当たった。

「当たった当たった！」

男の子たちはそれを見て笑っている。私は感情のない目で男の子たちを見た。

「なんだよその目は！ バケモノのおまえがいけないんだろ?!」

そう男の子たちは私に言って去って行った。どうして？ 私何もしてない。しようとも思はない。なのにどうしてわかってくれないの？ どうして私を見てくれないの？ もういや!! みんな・・・みんななく・・・

っガバ!!

「ハアハアハア・・・ゆ・・・め・・・?」

夢なんて久しぶりに見た。いつもはそんな夢見ないのに。急にどうしてこんな夢見たんだろう？

気分が落ちてきた！ こういうときは歌うのに限る！

「~~~~」

30分、1時間くらい歌ったところで満足した私はまだ寝室にいることに気付いて慌てて寝室から出る扉まで向かってあげた。

だがそこに広がっていたのはいつも見ていた廊下ではなく森の中だった。

「は・・・？ いやいやいやありえないって！ だってここ普通に家だったでしょ？！ 何？！ なんで？！」

私はテンパっていて後ろに誰か（？）がいることに気づかないでいた。

「・・・誰だ？」

私は急にかかった声に驚いて後ろを振り向くとそこにいたのは今までの物語の中ででした見たこともない生物がいて目を見開いた。

## 第1話 プロローグ（後書き）

主人公は迫害を受けていましたが明るい性格の持ち主です。  
まあそこはお気になさらず！

## 第2話 異世界にきちゃった(前書き)

前回は以外にも短かったなので今回は長めにしたいと思います。

## 第2話 異世界にきちゃった

私は目を見開いたまま相手を見た。

大きな体に人間を簡単に飲み込んでしまえそうなほど大きな口。そこから納まりきらないほどの鋭くとがった牙。それから何もおも貫かんとする堅そうな真つ黒な鱗。

どこからどう見ても物語上でしか存在できないはずのドラゴンがそこにはいた。

『もう一度問おう。貴様はどこからきてどうやってこの森に入った？』

え・・・？ええええええ！！も、もしかして今ドラゴンが喋ったの？！ドラゴンって喋れるの？！喋れないよね？！私の知っているドラゴンは喋れなかったよ？！って知ってるって言っても物語上のってことだけど・・・

私がテンパっている間に返答がなかったのを答えないと取ったのか機嫌が悪くなっていくドラゴン。グルルウと呻り始めた。

私は急いで答えようとしたが自分の今置かれている状況をいまいち理解していないためかなんと答えていいのかわからない。とりあえずは何か答えないと・・・

「え、えつと・・・ここは・・・どこ・・・なんでしょうか・・・？」

『何？貴様はここがどこだかもわからずに踏み込んだというのか？』  
表情まではわからないけどどこか呆れを含んだ声だった。

『ここはアスファラ大陸に存在する禁忌の森だ。』

呆れながらも説明してくれた言葉に私は絶句した。

アスファラ大陸ってどこ？禁忌の森？も、もしかして・・・いやいやいやそんなこと絶対あり得ない！だってそれは小説の中だけのことだし実際にあったことだなんて聞いたこともないもの！でもそうだとすれば今の状況がすべてつじつまがあう。

「私・・・異世界にきちちゃった・・・？」

私がぼそつとこぼした言葉を聞いたのかドラゴンは驚愕(?)した。

『まさか・・・とは思っておったが本当だったとは・・・この世界ではまずこの森には人間は絶対に足を踏み込まん・・・ふむ・・・貴様名はなんという？』

少し考えたかと思うと急に名前を聞いてきた。私は本当の名前を名乗っていいのかわからなかったがどうしてか目の前にいるドラゴンは信じられた。

「私の名前は鈴原美羽。えっと・・・あなたのお名前も聞いてもいいですか？」

目の前にいるドラゴンはまさか自分も名前を聞かれるとは思ってなかったのか少し目を見開いていた。だがそれもすぐにおさめて言っ

た。

『我の名は本当は人間には教えたくないのだが・・・ふむ、ミウと言ったか、お主に興味がわいた。我の名はアスターク。ミウ、異世界からきたと言っていたが行くところはあるのか？ないのならば我と一緒にくるといい。』

私はドラゴン、アスタークの言葉に驚愕した。私を見た人は避けるか無視するか罵ってくるかのどれかだったからだ。

私が驚愕しているとアスタークは不思議なものでも見るかのような視線を私に送ってきた。

『なんだ？行くところがあるのか？』

私はその声に我に返って言った。

「え？私と一緒にいてくれるの？私と家族になつてくれるの？」

つてうわああああ私何言っちゃってるの?!ばかあああああ!!  
!何ドラゴンに向かつて「家族になつてくれるの?」っておかしいでしょ!!絶対私おかしい子になっちゃってるよ〜ど、どうしよ・  
・

『なんだ？ミウは家族がほしいのか？なら良い。我とともに暮らすのだ。好きなようにするといい。』

う・・・そ・・・ずっと、ずっと欲しかった家族になつてくれるって・・・どうしよす〜いうれしい!!

私は気がついたらアスタークに向かって笑顔を向けていた。

## 第2話 異世界にきちゃった（後書き）

はい！無理やり2人（？）の出会いを締めくくらせていただきまし  
た！

ほんと無理やりで申し訳ないです。想像力がほしい・・・  
なんで？とかは思つかも知れませんがお許しください！  
想像力&文才がないんです；；；  
ま、まあーとりあえずお付き合いありがとうございました。

### 第3話 旅立ち（前書き）

アスタークは実際人間の言葉をしゃべることはできませんが主人公は言っていなかったですが前の世界で動物の言葉がわかっていたのでそれを知ったアスタークはいまでは魔物の言葉で会話しています。

### 第3話 旅立ち

私とアスタークが家族になって半年がたった。

最初のうちはサバイバルになれていなくて苦労したけど半年たった今では慣れたもので苦労はまだ少し残るけどアスタークという家族がいるから幸せに暮らしている。

そういえば最初アスタークの家に行った時はびっくりした。だってアスターク、女性で子供がいたんだもの！　じゃべり方からして男性だと思ってたから余計びっくりしちゃった。アスタークは『人間みたいに雄だ雌だという感覚は我等にはない』だそうです！　種族が違うだけでこうも考え方が違うのだと思い知らされた時でもあった。

そしてなんと！　アスタークはこの世界で1位、2位を争うほど強いんだって！　それでアスタークより強い魔物って誰？　って聞いたら『この大陸にはいないが他の大陸にフェンリルがいる』んだって！　ぜひ機会があったら会ってみたいな

そして今現在、私が何をやっているかというアスタークとヨアン（アスタークの子供）に歌を披露します！　なんでか一回口ずさんでいたみたいでそれを聞いたヨアンが気に言って毎日毎日歌ってと言われてたので今では日課になった。

『うむ、いつ聞いてもきれいな歌声だ。ずっと聞いていても飽きぬな』

『うん！　きれーなの！　ミウの歌はキレーー！』

歌い終わった私に2頭は言った。いつも歌い終わった後に言ってくれる言葉で聞きなれているけどやっぱり言われるとうれしいものだ。

「ありがとう。前は自己満足で歌ってたけど聞いてくれる人がいるだけでこんなにも違うものなんだね。」

私は心からの笑顔を2頭向けた。それを眩しいものでも見るかのように目を細めたアスタークが言った。

『ミウよ、話がある。』

私はいつもは聞かない真剣な声にいやな予感がしながらも頷いた。

『ミウよ、我はおまえに世界を見てもらいたいと思っておる。』

言われた私は最初言っている意味がわからなくて啞然としてしまったが徐々に自分の中にアスタークの言った言葉がしみ込んできて気づいたら叫んでいた。

「どうして?! 私・・・私このままでいい!! ここにいたい!!」

私は今にも泣き出しそうな顔をしてアスタークに訴えた。

『・・・我はおまえをいじめたいわけではない。ただ短い人生をこんなところで歩んでほしくはないのだ。我らと違って人の子はあつという間にその人生を終わらせてしまふ。その前におまえには世界を見てほしいと我は思っておるのだ。』

その言葉を聞いた私はここまで自分のことを考えていてくれていたなんて思わなかった。初めて会った時は無理やり家族になってしまつて迷惑をかけていると思つていたから余計に今の言葉は私の心に響いて目から涙がこぼれてしまった。

「でも……でも私見た目がこんなだし……誰も受け入れてくれなかつたらつて思うと怖い……」

そこまで言うとアスタークは短いため息をもらした。

『何を言つておる。おまえはこの森から出たことがないからこの世界の人間を見たことがないからわからんだろがこの世界からしたらお主の銀の髪に赤い瞳はなんら不思議ではないぞ』

嘘……だつて銀の髪に赤い瞳だよ?! この外見がなんら不思議じゃないつて……他の人はどんな感じなの?! ちょ、ちよつと興味がわいたかも……だけどここまでお世話になつて迷惑までかけたのに興味がわいたからつて出て行くのはどうなんだろう……。

『クツクツクツク……お主はすぐに顔に出るな。そう不安な顔をするな。おまえは私の娘だ。偽りはない。親にとつて子には旅をさせたいものだ。興味があるのであれば行つてくるといい。そして帰りたくなつたら帰つておいで。待つているから』

アスタークはやさしい声で私に言った。涙が止まらないまま私は何度も何度も頭を縦に振つた。それを見ていたアスタークは私のところにまで来てくれてやさしく壊れ物を扱つかのように頬につつた涙をなめてくれた。

『もう泣くな。我はどうしたら良いのかわからぬ。』

苦笑い混じりに言われたので私は笑顔になつて答えた。

「私この世界を見てみたい！ 人に触れてみたい！ ごめんなさい・  
・拾つてもらつて恩もまだ返せていないのに・・・」

『おまえが謝ることはないよ。我が先に言いだしたこと・・・行つ  
ておいで我とヨアンはここで帰ってくるのを待っているから』

私はその言葉に胸が熱くなるのを感じて何度も何度もありがとつ  
て口にした。

翌日私はアスタークと一緒に森の出口まで来ていた。

「じゃあ・・・行ってくるね！」

『ああ・・・行つておいで。』

私はやさしい言葉をもらつてアスタークに教えてもらった近くにあ  
る村まで歩いた。

### 第3話 旅立ち（後書き）

っていうことで今回はミウが森の外に出るまでの話を載せました。  
ええ！ミウちゃん、もう一度人とかかわってみようと決断をくだし  
ました！

そしてヨアンが空気になっていた件ですが気にしたらだめです！（  
笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0085ba/>

---

闇の歌姫

2012年1月1日22時48分発行